

## ◆新しいことに挑戦したくて◆

山中優里奈

私は、今年の夏、JFC ネットワークでインターンをさせて頂きました。私がこのインターンシップに参加させていただいた理由は2つあります。1つ目は、何か新しいことに挑戦したいという気持ちでした。高校時代を勉強と部活で過ごしていた私は、大学生になったら様々なことに挑戦したいという気持ちがありました。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、中々新たなことに踏み出せずにいました。そして2つ目は、国際問題について興味があったことです。国際系の学部にも所属する大学生なのですが、まだ1年生ということもあり、今は学部の専門科目よりも、幅広い分野である基礎科目を主として学んでいます。そのため、国際問題について触れる機会が少なく、知識も薄い状態でした。このようなことから、職員の方々と直接コミュニケーションをとりながら、国境を越えた問題について触れられる、NPO 法人 JFC ネットワークでのインターンシップに挑戦することにしました。



JFC (Japanese-Filipino Children) という言葉を全く耳にしたことのなかった私は、「JFC 問題」について知ったとき、とても驚きました。まず、今までの私の「身近な国際問題」のイメージというのは、各国内で起きている貧困や差別などの漠然としたものでした。しかし、JFC 問題のように、2つの国の人々が交わったことで起き、そしてとても限定的に見えて実はこの問題を抱え、苦しんでいる人が多くいるというこの事実は、私の概念を大きく覆すものでした。

JFC ネットワークへ足を運び、「職員の1人」として実際の業務を行いました。出生証明書（戸籍謄本）や、血液型証明書など、自分のものさえも見たことのない資料やフィリピン人であるお母さんの陳述書を通して、「JFC 問題」について深く触れていく中で、多くの衝撃を受けました。お母さんの生い立ちや、日本人の夫との出会い、現在の状況など、私の生活からしたらとても現実とは思えない人生を、JFC の子どもたちやその家族たちは送っているのだと知り、JFC の子も、その母親も、親戚も、そして父親も今までどんな思いで生きてきたのだろうと、ただ「JFC 問題」があると知ったときよりも胸が痛くなりました。

また、私の個人的な NPO 法人の企業が行う仕事のイメージは、物資の寄付や現地への体を使ったボランティアなど、公に「表に立って」支援するというもののみでした。一方で、JFC ネットワークが行う仕事は一般の方には「見えないところ」で支援していくというものであり、私の考えとは全く逆のものでした。しかし、その陽が射していないところでの、この機関の方々、それに関わる方々の仕事1つ1つが、多くの子どもたちやその母親にも温かい未来と笑顔を届けているのだと感じ、中々経験できることのない、明るい未来への手助けが自分にもできたのだと、とても嬉しく思いました。そして、JFC ネットワークの活動は「見えないところ」で動いているからこそ、JFC 問題について私たち1人1人が深く知っていくべきだと感じました。そのためにも、まずはこの現状を知る「私」から動こう、最初は自分にとって身近な人々にこの問題が起きている現状や、JFC ネットワークの活動を共有していこうと、そう強く思いました。

JFC ネットワークは、本当に温かい場所でした。毎週ここに来て、たまに里枝子さんや誉子さんと JFC 問題やフィリピンにまつわることから、自分の考え、プライベートなことまで、様々なお話ししながら、仕事をするこの時間が、私の楽しみの1つでした。インターンシップをさせて頂いていただけではなく、また1つ自分にとっての居心地の良い居場所ができたように感じました。また、自分にはなかった考えや現実、知識をたくさん知ることができ、刺激をたくさん自分にとってかけがえのない2ヶ月間になり、ここでインターンシップをして本当に良かったと思えました。こんな貴重な経験をさせて下さった JFC ネットワークの職員の方々にはとても感謝したいです。

## ◆目の前の小さな作業が課題解決の第一歩◆

まひろ  
福島 菜尋

私は今年の8月と9月の約二か月間、JFC ネットワークでインターンをさせて頂きました。「JFC」という言葉さえ聞いたことがないような状態でしたが、二か月のインターンを経て非常に多くのことを学び、感じました。中でも特に自分にとって印象的だったのは、職員の方がおっしゃっていた、「一見地味な作業こそ、JFC の子どもたちの救済への第一歩だ」という言葉です。この一言に、私たちが社会課題に対するときのあるべき姿勢のようなもの



が詰まっていると感じました。

そもそも私がこの夏インターンに参加した理由は、もともと関心のあった人種・移民問題などについて、実際に活動しながら学びたい、そして課題解決に貢献したい、と思ったからです。自分の手で何か大きなことを成し遂げたい、と意気込んで参加しましたが、いざ JFC ネットワークでのインターンが始まると、今までの自分の考えに疑問を抱くようになりました。実際に私が JFC ネットワークで行った主な作業は、JFC の父親への認知請求や養育費請求裁判に必要な資料の翻訳です。翻訳作業は大変根気のいる作業でしたし、依頼者である JFC やそのお母さんに直接会う機会はなく、そして実際に認知が成立するまでタイムラグがあるため、本当に自分が子どもたちやお母さんの役に立てているのか、と感じていました。そしてそもそも経験も知識もない学生の私に、社会課題を解決することなど不可能なのではないかと考えるようにもなりました。しかし、職員の方から先の言葉をかけていただき、自分のしていた翻訳が、子どもたちを救う可能性を秘めている、重要な作業だと気づくことができました。

またインターン中にも、実際に JFC ネットワークの活動の意義を痛感した出来事がありました。とあるケースで、認知請求が成立し、日本国籍を取得できた JFC の男の子の日本名を考え、私の考えた名前が採用されたことです。通常、生涯で自分の子どもや孫以外の人の名前を考える機会はないと思います。そのうえ私にとってはその男の子が「初めて自分が名付けた子」でした。自分が名前を考え、今後日本で、日本国籍をもつ日本人として生活できることを思うと、本当に嬉しかったです。地道な資料の翻訳作業が、積もり積もって一人の子どもの人生を変えることができるんだ、自分にも子どもたちのためにできることがあるんだ、そう感じることもできた出来事でした。

私の JFC ネットワークでのインターン期間はたったの二か月間でしたが、その短い時間の中でも、JFC の抱える課題や現状について非常に多くのことを学ぶことができました。そして、微力ではありますが、JFC の子どもたちを救うためのお手伝いできたのではないかと思います。しかし、私がインターンで携わらせていただいたケースはごく一部ですし、JFC の問題は裁判が終わったからといって完全に解決したわけではないと思います。国籍取得後、日本人として社会生活を送る中で新たに直面する課題もあります。そして現在の社会は、JFC の問題以外にも、様々な人種などをめぐる問題を抱えています。それらすべてに対して、JFC ネットワークで教えていただいた、「目の前の小さな作業が課題解決の第一歩である」ということを忘れずに、自分なりの方法で向き合っていきたいと思います。

最後になりますが、JFC ネットワークの皆様、この度は貴重な経験をさせていただき、本当にありがとうございました。